

展示解説



松本市立考古博物館

展示解説

松本市立考古博物館



住居址一括土器 雨堀遺跡第6号住居址



埋壺 前田遺跡



土器 坪ノ内遺跡

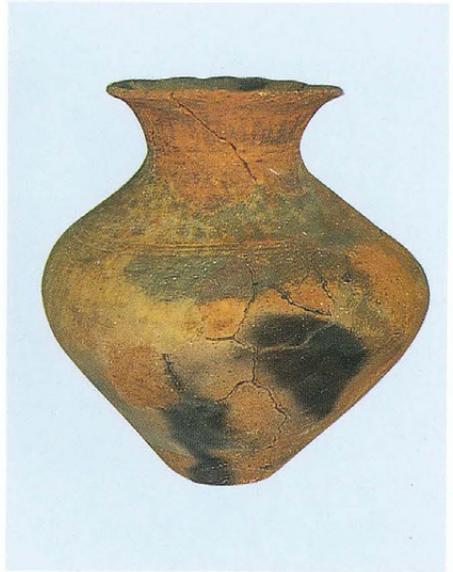


土偶 女鳥羽川遺跡

縄文時代



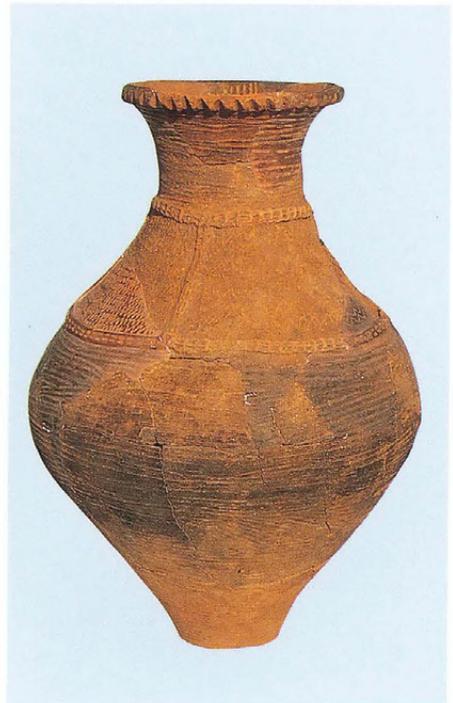
大陸系の磨製石器 あがた遺跡



遠賀川系の土器 針塚遺跡



再葬墓(針塚遺跡)出土の土器
(左：土壙2・右：土壙4)



弥生時代



弘法山古墳出土土器



銅鏡(左：弘法山古墳・右：中山36号古墳)

古墳時代



装身具 柏木古墳



刀装具 柏木古墳



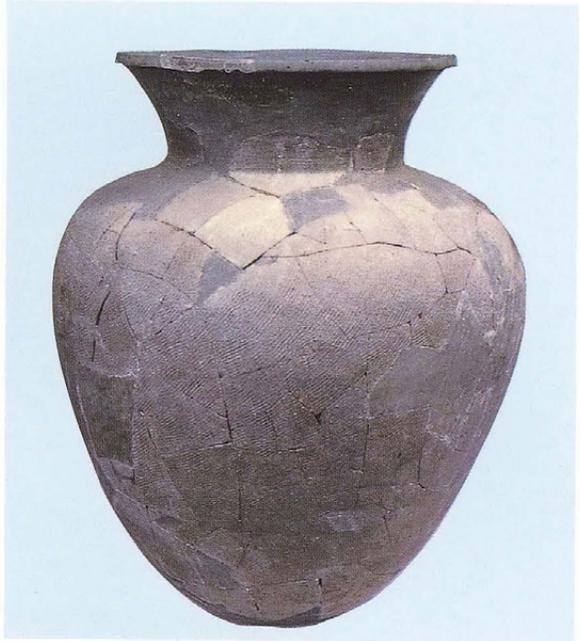
杏葉 中山15号古墳



つか 坪ノ内1号古墳
古墳時代



須恵器 短頸壺



大甕 秋葉原古墳



土師甕 南栗遺跡



灰釉陶器・長頸瓶・碗・皿 平田遺跡

奈良・平安時代



三彩小壺 下神遺跡



銅碗 北栗遺跡



釵子 さいし あがた遺跡

奈良・平安時代

ごあいさつ

松本市は古くから遺跡や古墳の豊富な地として知られており、出土遺物も博物館や中山考古館等に保管・展示されてまいりました。

しかし、昭和54年頃より中央道長野線建設に先立つ県営ほ場整備事業がはじまり、埋蔵文化財の発掘調査も急激に増加し、貴重な新資料を含む膨大な遺物が出土しました。

そのため、これら資料の公開・活用と、整理・収蔵をはかる場所の必要が生じ、松本市は新たに中山の地に考古博物館を建設し、公開展示と整理・収蔵・研究の拠点として、昭和61年8月2日に開館いたしました。

当館の展示は小学校高学年を対象として、わかりやすく、また自分自身が参加・体験することを目指して、古代公園には復元住居と野外学習のためのデスク等も備えました。

本解説書は常設展示の解説書ではありますが、限られた展示スペースでは充分意をつくせない部分をカバーできたと、展示品以外の出土遺物についてもふれております。その点本書が松本市の考古学案内書としてご活用願えれば幸いです。

昭和62年3月

松本市教育長 中島俊彦

目 次 凡 例

縄文時代 1

弥生時代 11

古墳時代 17

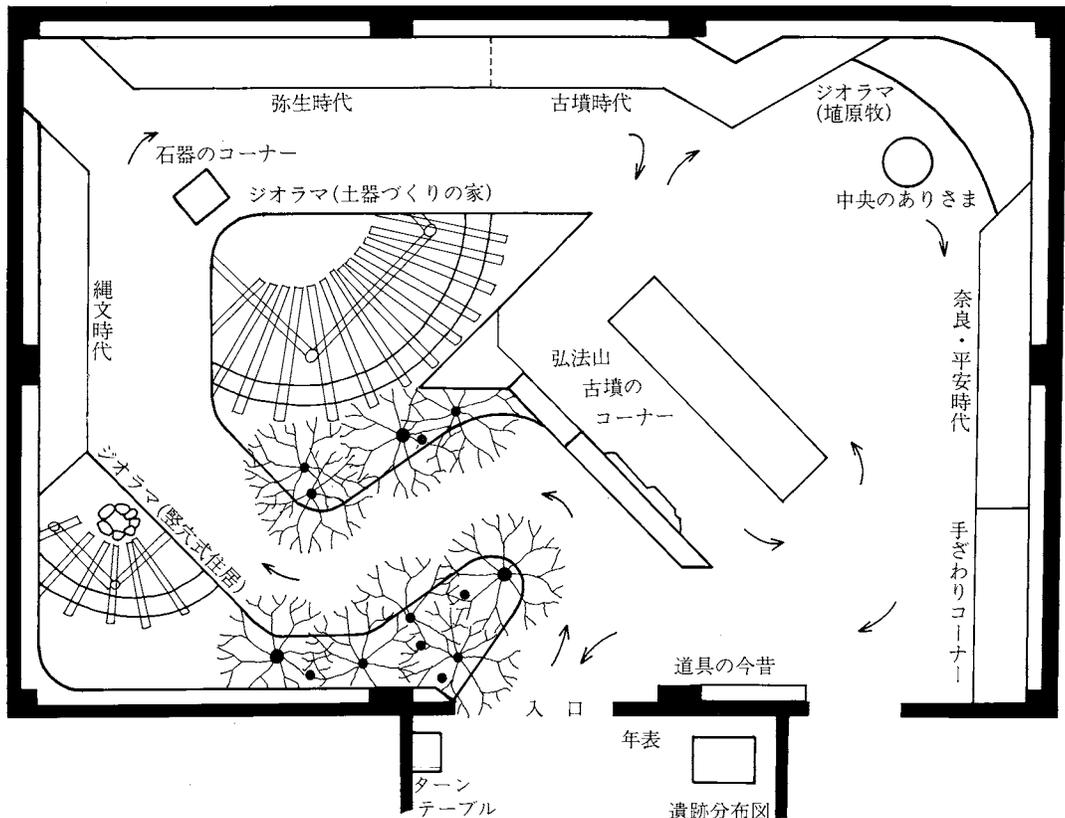
奈良・平安時代 27

遺跡年表 32

展示資料一覧 33

1. 本書は松本市立考古博物館の展示解説書です。
2. 展示はより良い資料をご覧いただくために展示替えを行っています。本書に掲載の資料は当館の基本的な資料です。
3. 本書の写真および挿図の縮尺は不同です。
4. 展示資料一覧は本書の発刊時のものです。展示替えのあった場合は追録によって補充いたします。
5. 使用した写真及び図は、主として市教育委員会所有のものを用いましたが、一部については外部のものを用いました。
6. 展開写真は小川忠博氏の撮影によるものです。

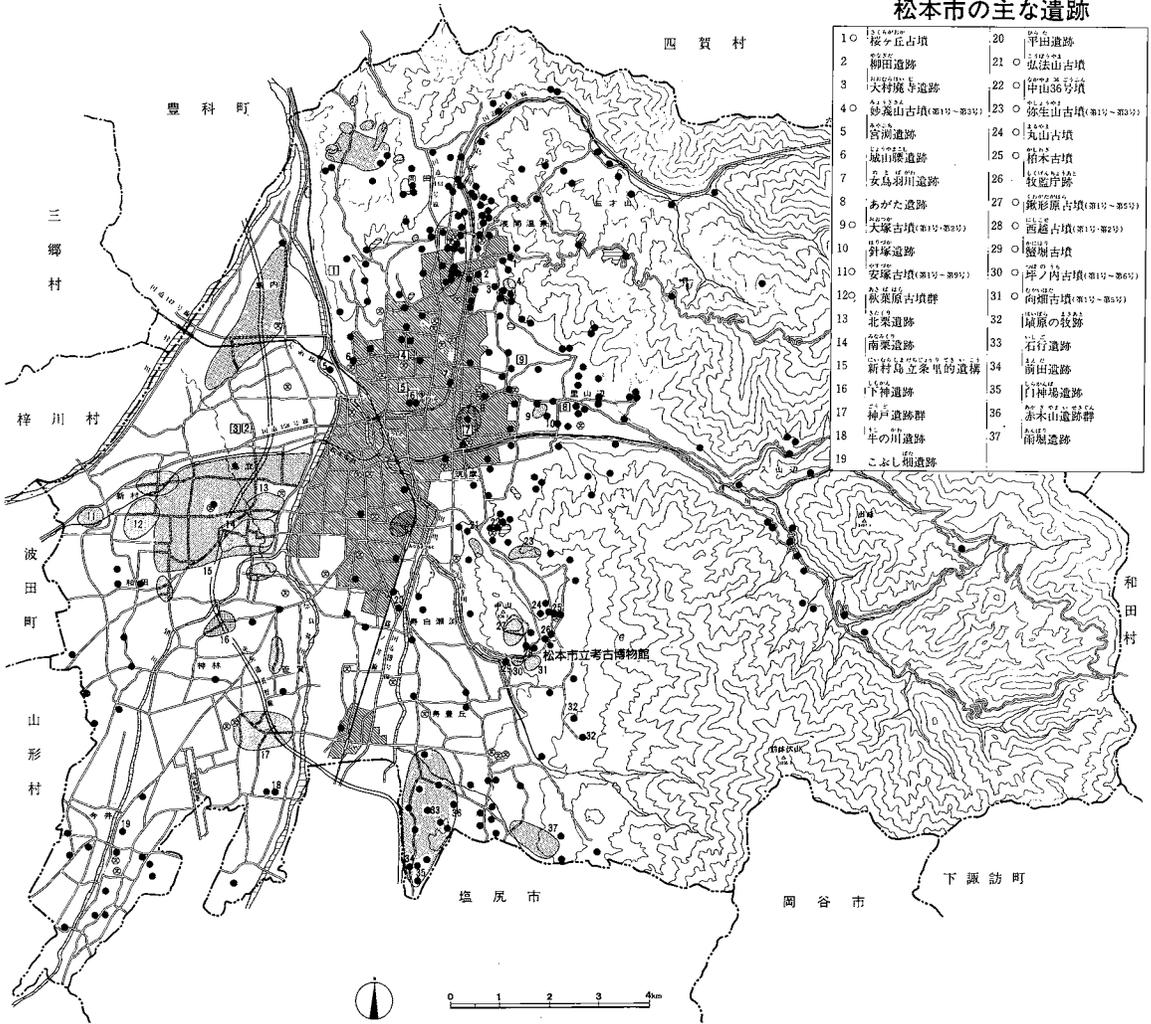
展 示 室 ご 案 内



松本市内の遺跡

松本市にはおよそ450の遺跡があります。日本全国では約20万、長野県全体では15,000箇所の遺跡があるといわれていますので、全国的にはやや多い部類に属するといえましょう。そのうち一番多いのは縄文時代の遺跡ですが、最近の発掘では奈良・平安時代の遺跡も増えています。遺跡の分布は、縄文時代は山麓に多く、弥生時代になると田川・薄川・奈良井川など河川の縁近くの段丘上にあり、古墳時代にはまた山際に多く分布しています。奈良・平安時代になるとほとんど現在の集落と重なります。しかし、最近の調査結果では、平地にも縄文時代や古墳時代の遺跡が発見されていますので、縄文時代には高地で、弥生時代には低地でなどと一概にはいえなくなっています。

松本市の主な遺跡

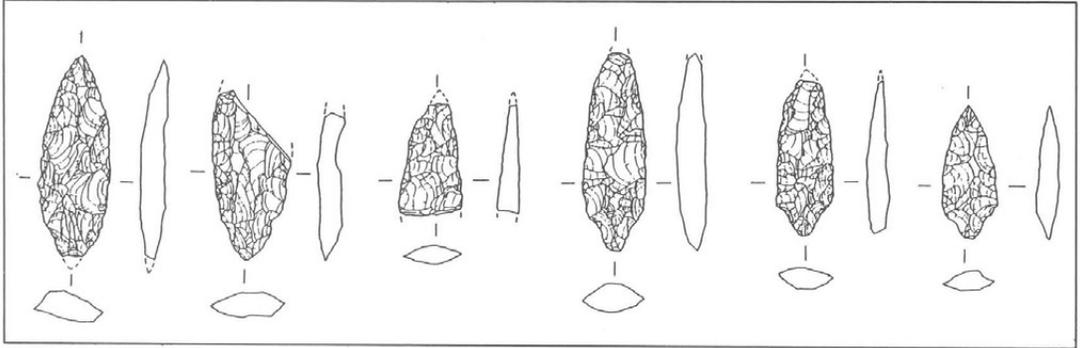


松本市遺跡分布図

旧石器時代 (~約12,000年前)

今からおよそ12,000年前までは土器が発明されておらず、人々は石で作った道具を使って狩猟や採集によって生活していました。

松本市内ではその最終末の時期の遺跡が7箇所発見されているのみです。いずれもポイント（槍先）、スクレーパー（搔器）などが表面採集されたのみで、遺構は発見されていません。



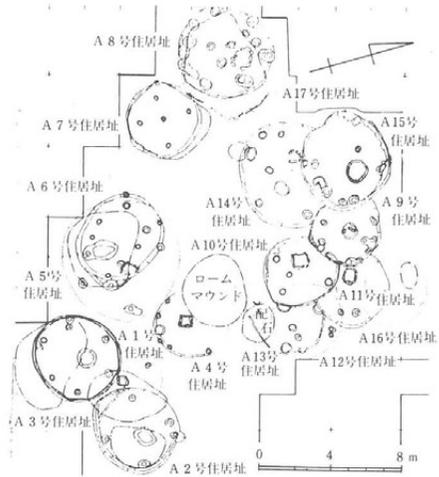
松本市内出土の旧石器 (1/2)

縄文時代 (約12,000年～2,300年前)

この時代は草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と六つに分けられています。縄文前期から中期にかけては気候が温暖で全国的にも遺跡の数が増大した時期で、松本市内でも縄文時代の遺跡232のうち、中期は121と52%をしめています。この時代の人々は日当たりがよく、水の便のよい丘陵や台地に小さな集落をつくって暮らしていました。家は地面を円形に掘りくぼめて、中央に石で囲った炉をつくり、4本あまりの柱をたて、カヤなどで屋根をふいた竪穴式住居で、一軒の家で5人あまりの人々が生活していたと考えられます。



雨堀遺跡 (第1次調査) 全景



同遺跡平面図

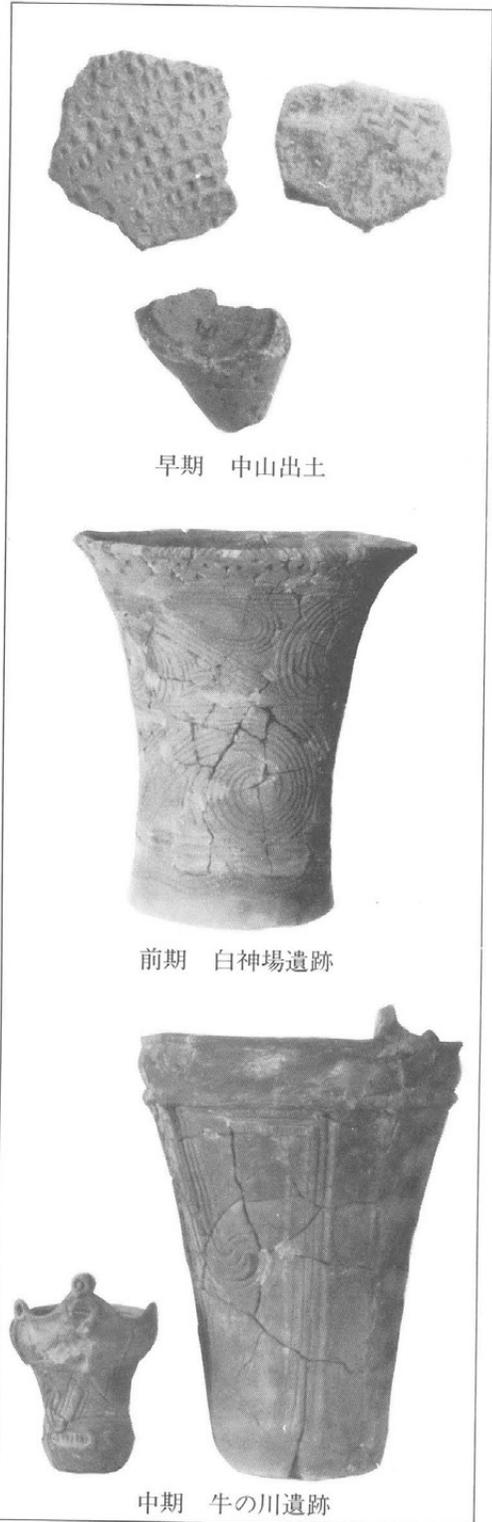
土器の出現

縄文時代になると土器が作られるようになりました。土器の出現はそれまでのナマのままか、焼いて食べるという料理方法に煮たきをすることを加え、人々の食べ物の範囲を広げることになりました。

縄文土器には深鉢や浅鉢などがあり、煮たきや盛りつけ、貯蔵などに使われました。土器の表面には粘土紐をはりつけたり、細竹を割ったものを使ったり（竹管文）、木の枝、より紐（縄文）などを使って文様がつけられています。

縄文時代の土器は時期ごとに特徴があり、その代表的なもので早期から晩期まで並べてみると、早期は底のとがった尖底土器で、棒に刻みや、くぼみをつけたものところかして文様をつけた押型文というものがあります。前期では土器の底は平らになり、縄文や竹管文がつけられています。なかには胎土に草などを入れた繊維土器もあります。中期になると文様は複雑化して突起や把手などがついて、いかにも力強そうなものや、粘土紐をはりつけたものなどがあり、縄文時代の最盛期に達します。後期になるとハデさはなくなり、あっさりとした器形になります。文様は縄文をつけたあと、部分的にすり消した磨消縄文すりけしが多く、器形も深鉢ばかりでなく、土瓶形の注口土器などがあらわれて、多様化します。晩期にはこの地方では無文のものも多く、他に沈線のあるものも見られません。

これらの土器はその時期時期で各地の土器とよく似たものがあり、文化の交流があったことをしめしています。



早期 中山出土

前期 白神場遺跡

中期 牛の川遺跡

縄文時代の土器



中期 雨堀遺跡

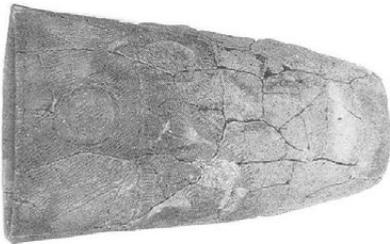


中期 牛の川遺跡



中期 前田遺跡

縄文時代の土器



中期
雨縄遺跡

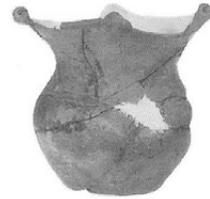


中期
牛の川遺跡



中期
前田遺跡

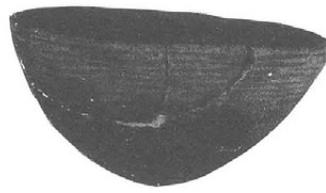
縄文時代の土器（展開写真）



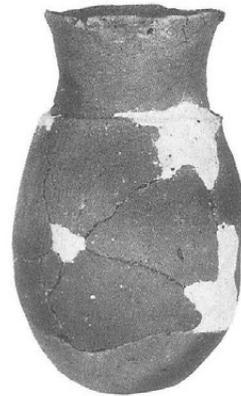
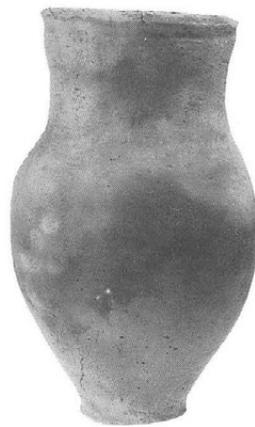
後期 中山出土



後期 坪ノ内遺跡



晩期 柳田遺跡



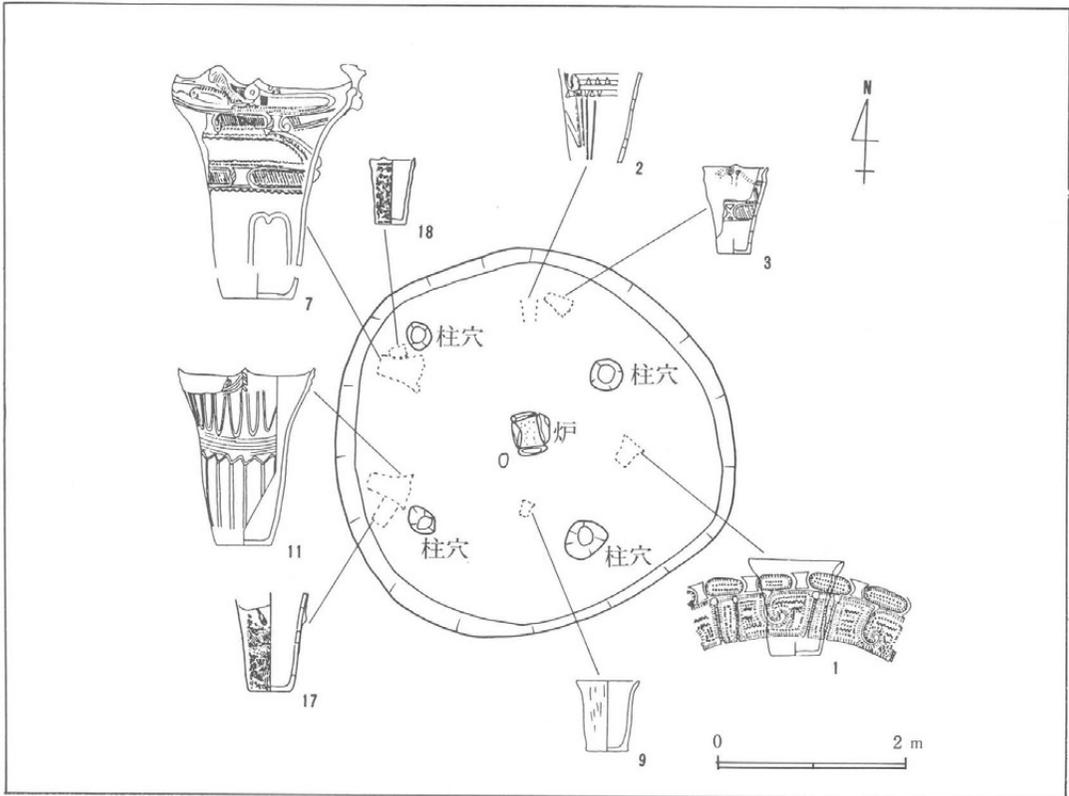
晩期 石行遺跡

縄文時代の土器

一軒の家の土器

一軒の家の中から10数個の土器が出ることもある一方、稀には一つも出ない家もあります。また何10個とあたかも土器捨場のように多量の土器が折り重なって出たこともあります。

牛の川遺跡第6号住居址の場合は下図のようになっていました。



牛の川遺跡第6号住居址遺物出土状況

このように一軒の家で使う土器の数はまちまちですが、煮炊き用、貯蔵用などの他、ランプやお祭りに使う特別なものなどと、使いわけていたようです。



石の道具

狩猟や採集に使われた道具は、石や木、動物の骨や角などでつくられました。松本では石で作った道具——石器がほとんどです。

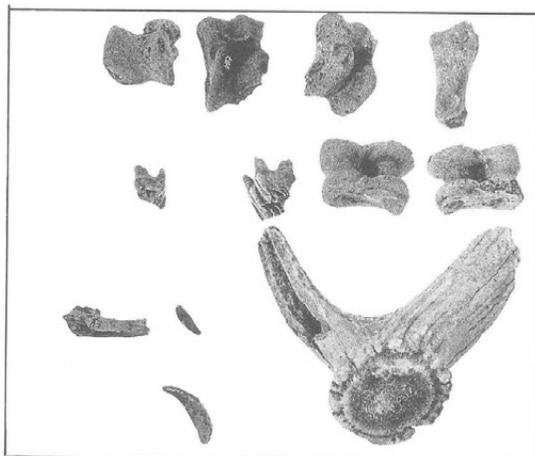
特に弓矢の矢の先に使った石鏃や土掘りに使った打製石斧は大量に出土しています。その他に食べ物を加工する石皿や磨石などがあります。

こうした石器は、当時の人々の生活を知る貴重なものです。



縄文人の食べ物

縄文人は狩猟採集により、生活していましたが、女鳥羽川遺跡からは鹿、熊、たぬきなどの骨や、ノモモ、クルミなどの木の実が出土しました。このほか木の芽や草の実などをとって、ナマのままや、焼いたりあるいは粉にしてパン状に加工して食べていたようです。そのほか、川魚や貝類などもとって食べていました。

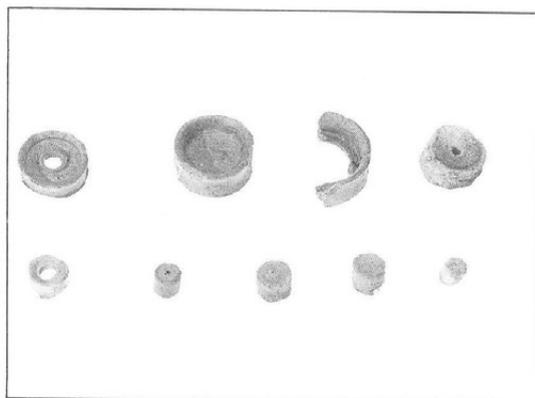


シカ、イノシシ、テンの骨 女鳥羽川遺跡

アクセサリー

縄文時代の人々はいろいろなアクセサリーを使っていたようです。特に目につくのは、耳輪です。耳輪は粘土を輪のようにし、朱色をつけたり、透かし彫りをして飾ったものを耳にはめこみました。

また、ヒスイや滑石などのきれいな石を使った垂れ飾りなどもつくられました。

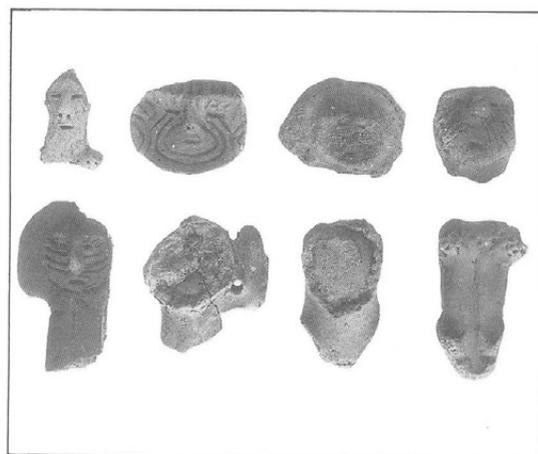


耳飾り 女鳥羽川遺跡

精神生活

縄文時代の人々にとって、天災、病気、死などに対する恐れ、驚きはつよく、なにかにすがることが必要だったと思われるます。

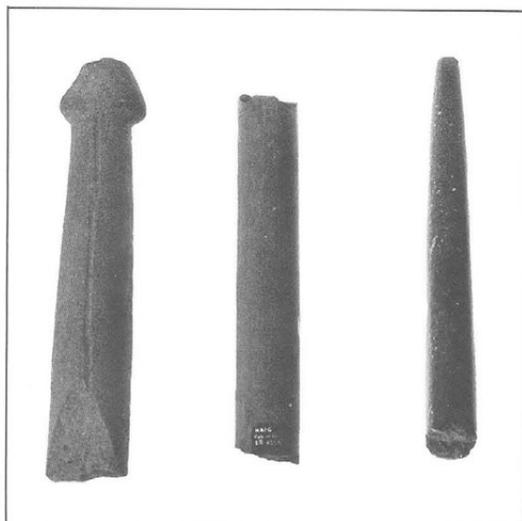
土偶は女の人を表わした土製の人形で、体の一部をもぎとって、病気やケガをした人の身代わりとされたり、豊かな実りを願ったものと考えられています。



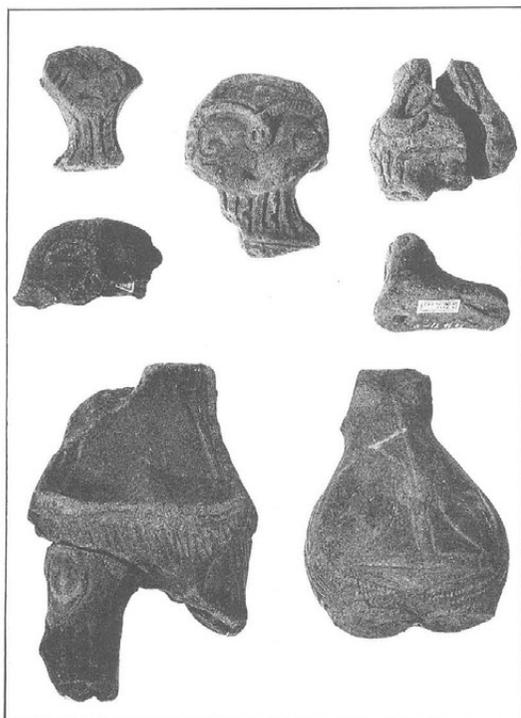
土偶 石行遺跡

石棒は狩りの成功や食糧の獲得のために祈るお祭りにつかわれたものと考えられています。

^{うめがめ}埋甕は住居の入口近くの床面に土器を埋めたもので、胎盤やこどもの骨をその中に入れ、こどもの無事な成長や再生を願ったものであるとか、家をたてるときの儀式につかわれたものと考えられています。



石剣 石行遺跡2 中山出土



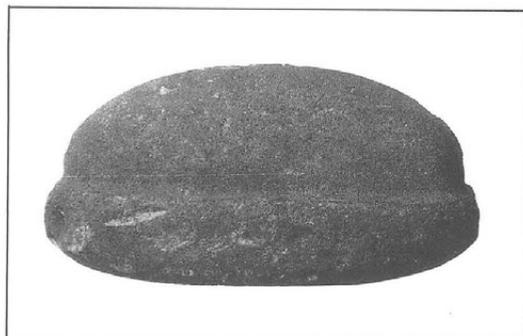
土偶 中山出土ほか



石棒 中山出土



埋甕 前田遺跡

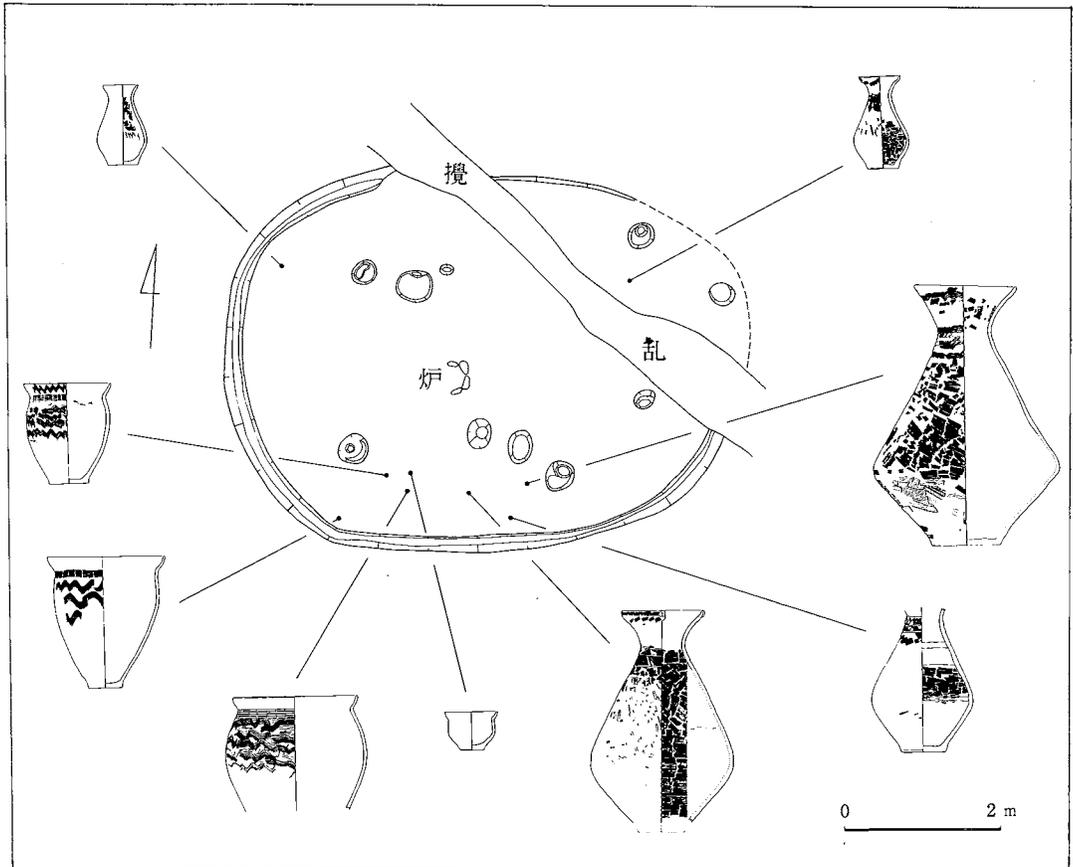


石冠 中山出土

弥生時代（約2,300年～1,700年前）

紀元前3世紀以降、稲作、金属器の使用・製作、紡織技術などを伴った新しい文化が、大陸から北九州へ伝えられました。そして、この文化は急速に日本の各地に広がっていきました。これ以後紀元3世紀後半頃までを弥生時代といい、その文化を弥生文化と呼んでいます。弥生時代は前・中・後期に分けられていますが、松本平に弥生文化が達したのは、前期の終わり頃だと考えられています。

この時代の人々は、稲作に適した低地に水田を営み、近くの小高い場所に集落（ムラ）をつくるようになりました。縄文時代からの狩猟・採集に加えて、米づくりをするようになったことで、人々の生活は安定し、ムラは次第に大きくなっていきました。その一方で、貧富の差が生まれ、力のある者は指導者となり、弥生時代の終わり頃にはさらに大きな地域（クニ）をまとめていくようになりました。



弥生時代の家 あがた遺跡第8号住居址

モミあとのついた土器

弥生時代の土器は使いかた（用途）に応じたようなものが作られました。

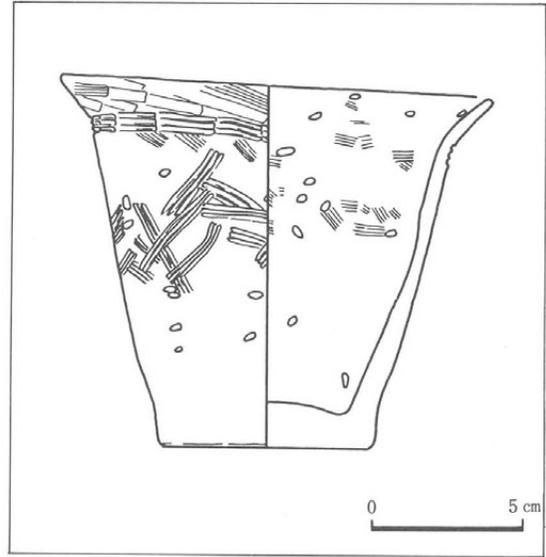
煮炊きをするための土器……………甕かめ

貯蔵するための土器……………壺つぼ

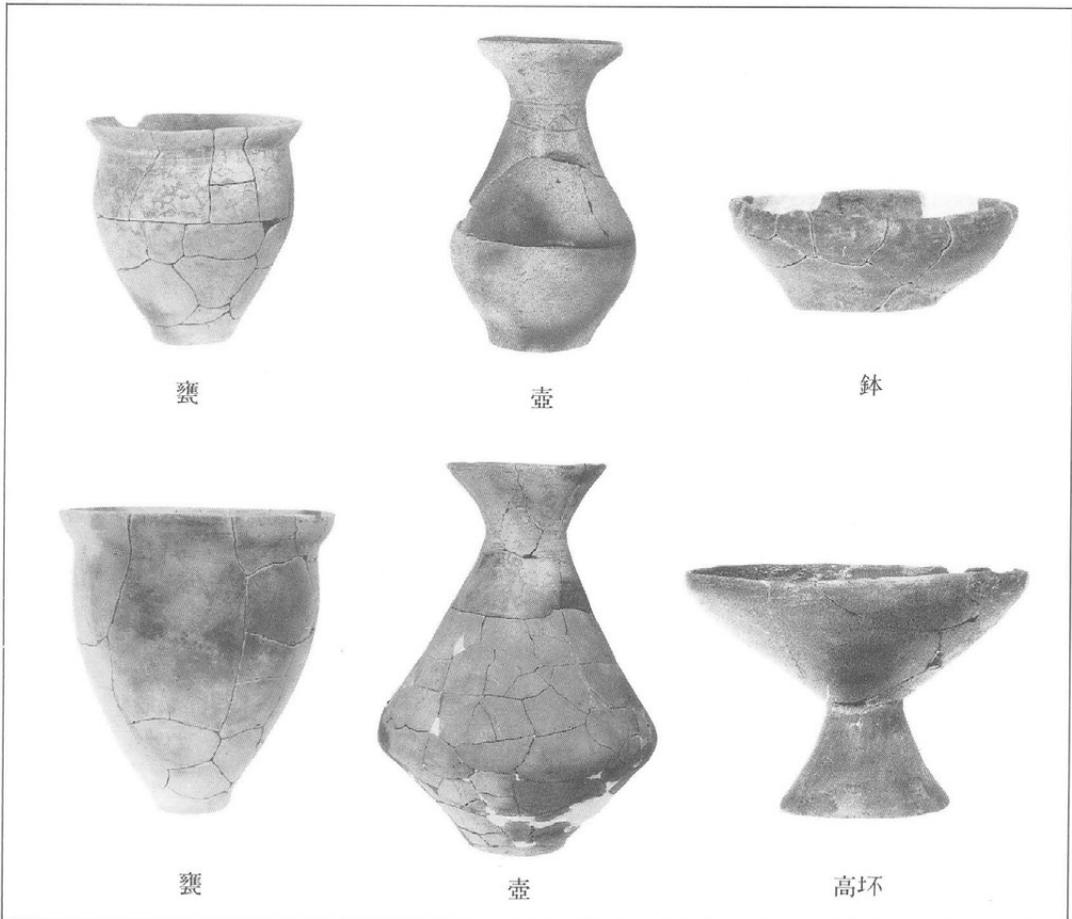
盛る、ささげるための土器……………鉢・高坏たかつき

文様は当初、縄文土器の伝統を強く残していましたが、新たに楡状のもので描く楡描文がさかんに用いられるようになりました。

弥生土器のなかにはモミあとのついているものもあり、当時米作りが行われていたことを知る手がかりとなっています。



モミあとのついた土器 あがた遺跡



あがた遺跡

石器から鉄器へ

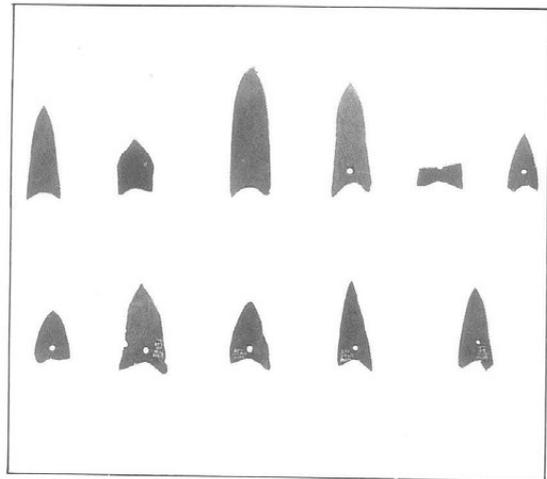
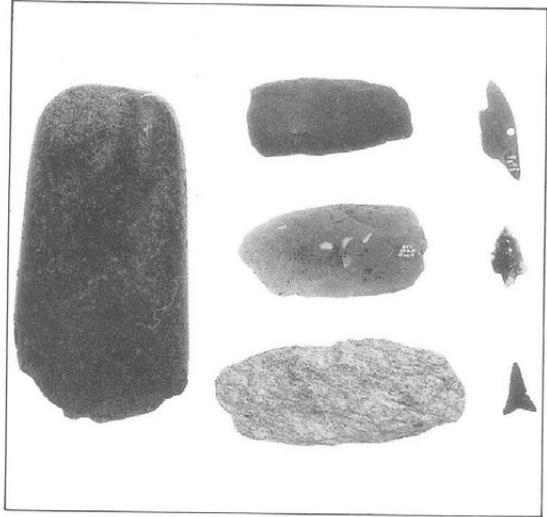
大陸からは稲作の技術とともに新しい道具——石器が伝えられました。

弥生時代の人々は、大陸系の磨製石斧で木を伐採・加工し、木製農耕具（クワ・スキなど）を製作し、田を耕しました。そして、秋には石庖丁で稲の収穫が行われました。

これらの石器も、弥生時代中ごろからの鉄器の普及によって、次第に姿を消していきました。

磨製石鏃

弥生時代の石鏃では、縄文時代からの打製石鏃に加えて磨製石鏃^{磨製せきぞく}が新しく登場します。中部地方から出土する磨製石鏃には、中央の下側に穴がけられているのが特徴です。



大陸系の磨製石斧

縄文時代の磨製石斧にかわって新しい磨製石斧が大陸から伝えられました。

^{ふとがたはまぐりば}太形蛤刃石斧 ……………伐採用

^{ちゆうじようかたば}柱状片刃石斧 ……………木材加工用

^{へんべいかたば}扁平片刃石斧……………木材加工用

これらの道具はセットで睨板や木製農具の製作に使用されたと考えられています。



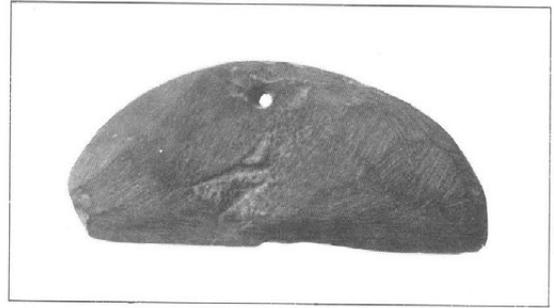
太形蛤刃石斧

扁平片刃石斧

あがた遺跡

石庖丁

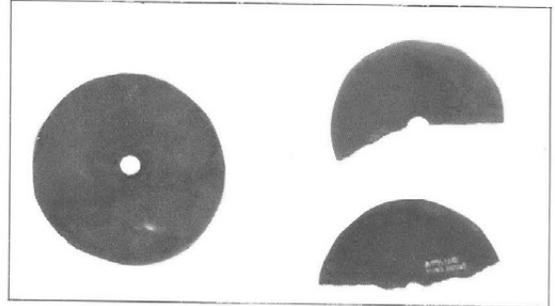
稲の収穫具。当時は稲の穂首を摘んで収穫しました。中央の孔は指かけの紐を通すためのもので、中部地方には一孔の石庖丁が多くみられます。



あがた遺跡

紡錘車

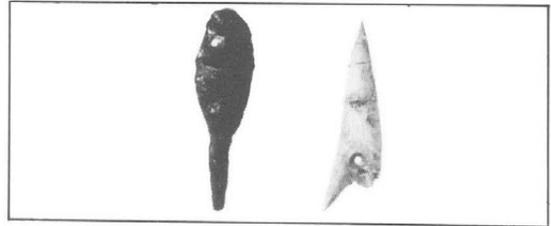
植物の繊維に撚り^よをかけて糸を紡ぐときはずみ車として使われました。このほかに土器の底部に残された布の圧痕をとおして弥生時代の紡織技術を間接的に知ることができます。



あがた遺跡

鉄鏃・骨鏃

弥生時代の道具は石だけでなく、骨・角・鉄・青銅などでさまざまなものがつくられましたが、錆びたり、腐ったりしてしまい、発見されるものはごく一部です。



宮淵本村遺跡

あがた遺跡

銅鐸とムラの祭り

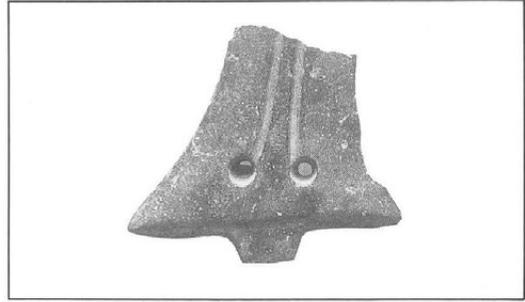
弥生時代の人々は、大地の靈に豊かな実りを祈ったり、感謝をするために、共同で祭りを行ったと思われます。

宮淵本村遺跡で発見された銅鐸はこうした稲作にかかわる祭りで使われたものと考えられています。銅鐸は本来、祭りのときに鳴らす鐘でしたが、後には大形化していくとともに、聞くものから見るものへと変化していきました。



武器形石製品

宮淵本村遺跡や付近の城山周辺では石剣・石^か戈などの武器形石製品が出土しています。これらの中には実際の武器としてではなく、祭祀に使われるものもありました。

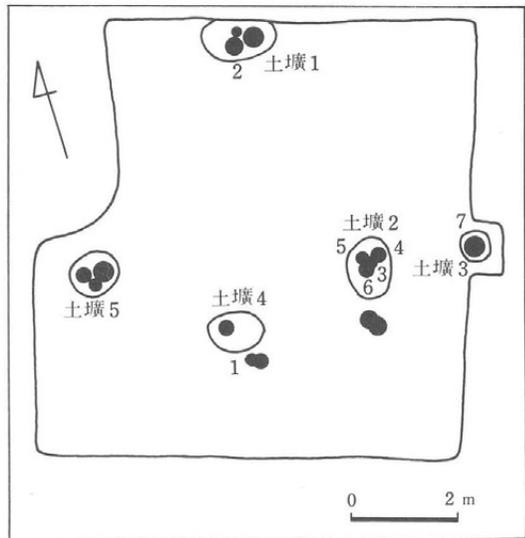


石戈 宮淵本村遺跡

再 葬 墓

里山辺の針塚遺跡では、松本平に最初に弥生文化が達した頃の再葬墓が発見されました。

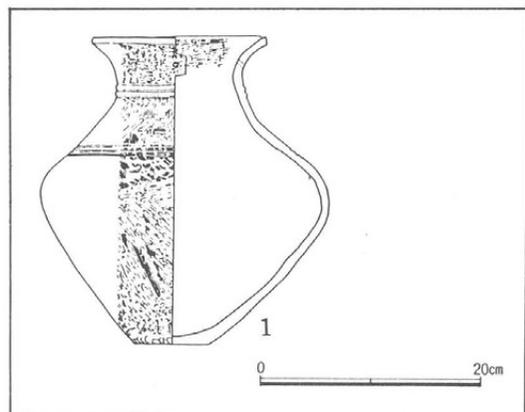
再葬墓とは、葬られた人が骨になってから、壺や甕に骨を納め穴に埋めなおしたものです。針塚遺跡では5基の再葬墓から12個の土器が出土しています。



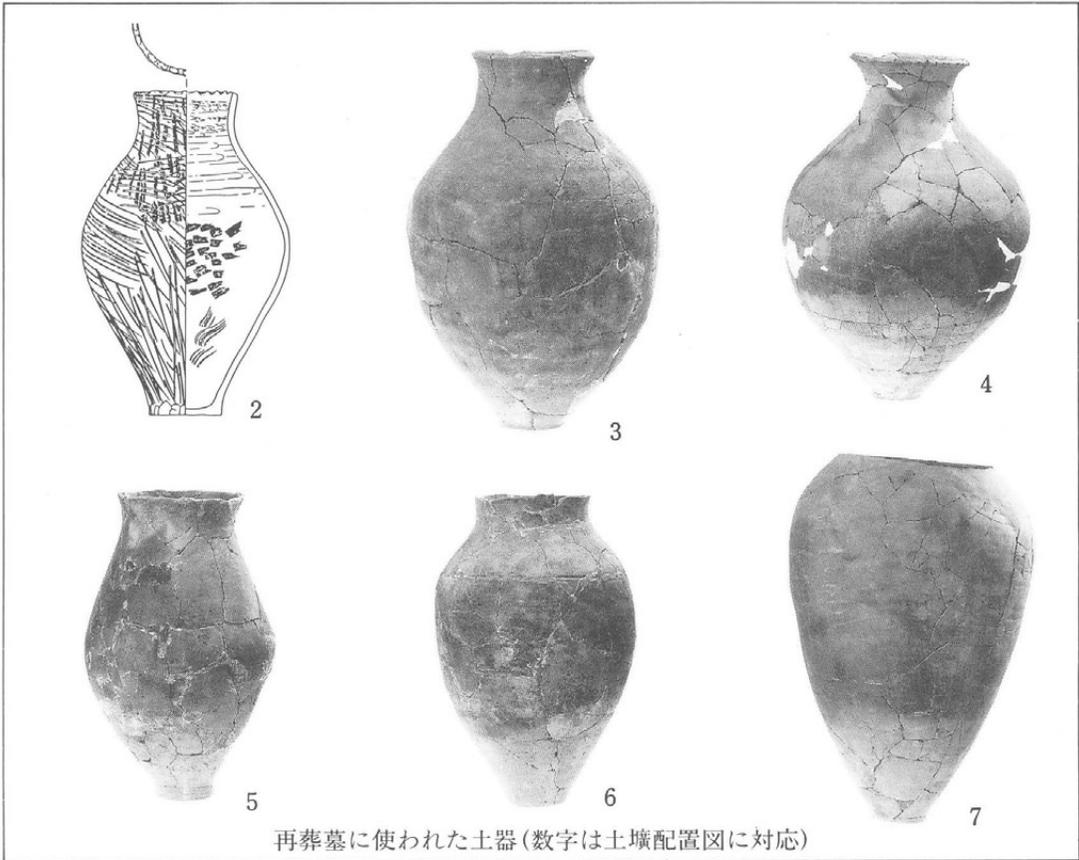
針塚遺跡の土壙配置

前期の土器

針塚遺跡の再葬墓——土壙4の南からは遠賀川系と呼ばれる壺形土器が発見されました。この土器は弥生時代前期に、九州から東海地方において多く分布しているものです。胎土分析の結果、地元の土でつくられたものとわかりましたが、松本平への弥生文化の流入を考える上で貴重な資料になりました。

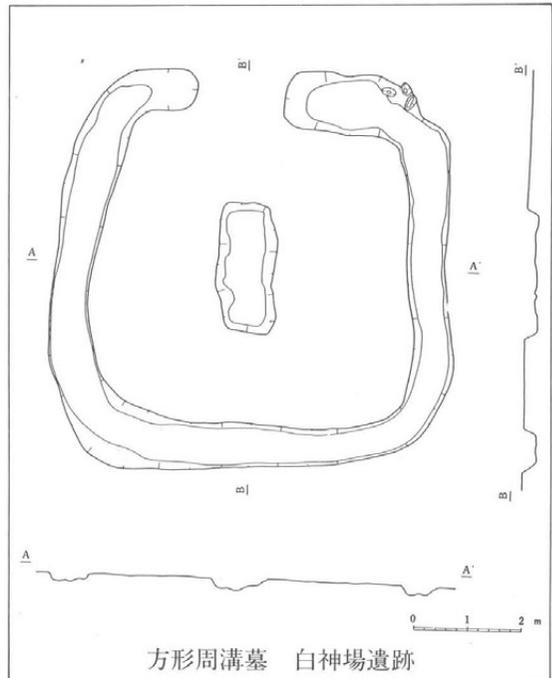


遠賀川系の土器



方形周溝墓

寿・赤木山の白神場遺跡からは、溝を方形にめぐらした中に埋葬施設をもつ墓——
ほうけいしゅうこうぼ
 方形周溝墓が3基発見されました。残念ながら、伴出遺物がなくこれらのつくられた時期は確定できませんでしたが、弥生時代から古墳時代にかけての松本平の墓制を考える上で貴重な遺跡であるといえます。



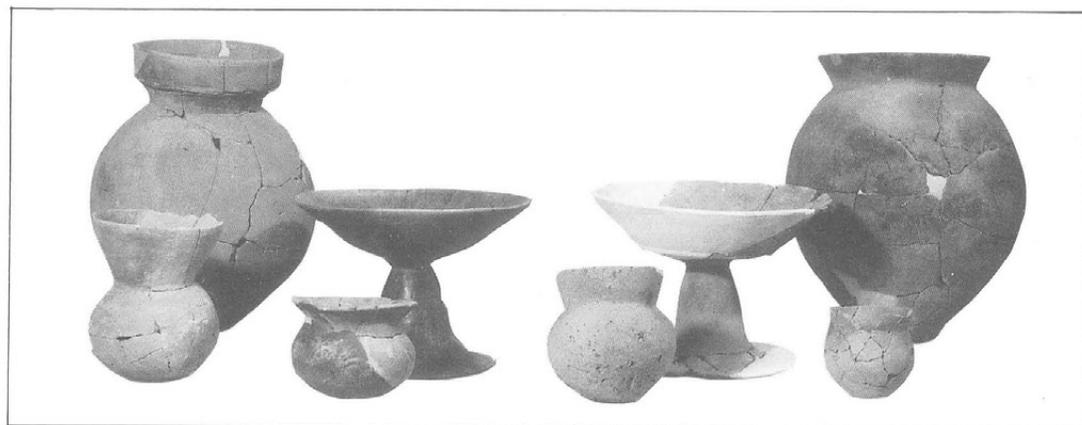
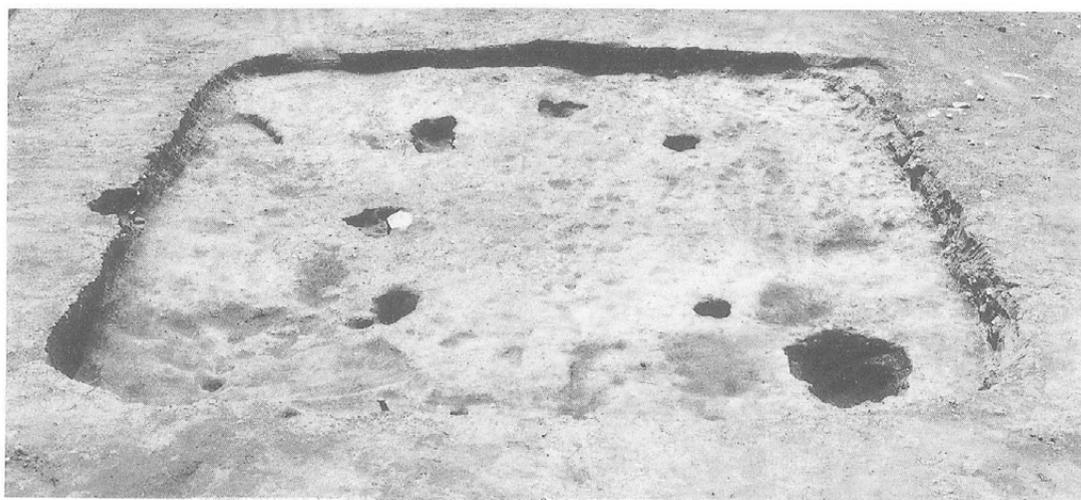
古墳時代（約1,700年～1,300年前）

紀元3世紀末～4世紀初頭以降、日本の各地で土を盛り上げてつくった墓——古墳がつくられるようになりました。これより、7世紀後半以降に古墳がつくられなくなるまでのおよそ400年間を古墳時代といいます。古墳時代は古墳の変遷から、前・後期あるいは前・中・後期に区分されます。

出現当初の古墳は、地域を治める人（首長）の墓であり、また後継者が首長権を継承する祭の場でもあったと考えられ、松本では弘法山古墳や中山36号古墳が知られています。

古墳時代の中頃から後半になると、中山・山辺・岡田・本郷など市内の各地に古墳がつくられるようになりました。その多くは横穴式石室をもった小規模な円墳です。この頃になると古墳の被葬者層は首長だけではなく、その下の有力者たちにも広がっていきました。また、新村では一般に古墳がつくられなくなる8世紀以降にも古墳がつくられたり、追葬が行われていました。

古墳時代の大半の人々は、竪穴式住居からなる集落を営み、鉄製農耕具により田畑を開墾していたと考えられていますが、松本ではこの時代の集落の様相はまだよくわかっていません。



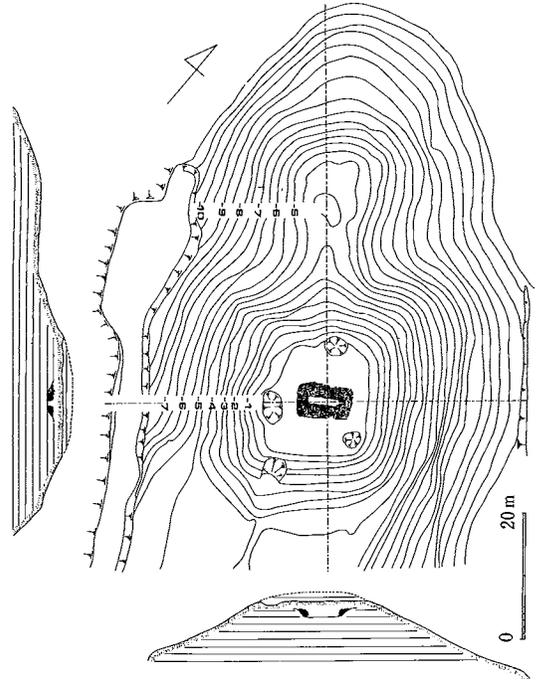
古墳時代の家と土器 しらかんぼ 白神場遺跡

弘法山古墳

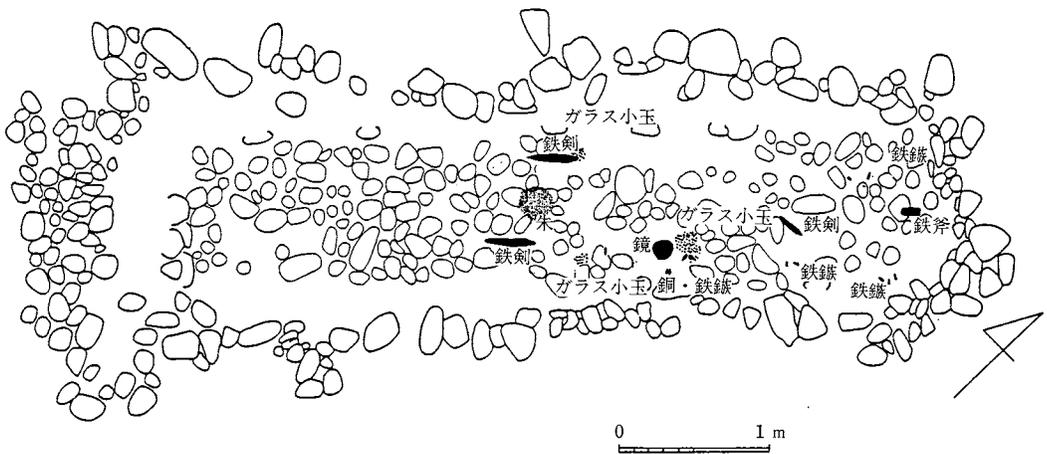
昭和49（1974）年に発掘調査された弘法山古墳は、前方後方墳で、4世紀半ば頃築造の県下最古の古墳とわかり、長野県の古代史を書きかえるものでした。

古墳は、中山丘陵の先端の、松本平を一望に見下ろせる場所に築かれています。後方部中央には、奈良井川・梓川など松本平を流れる川から運ばれてきた河原石で竪穴式石室がつくられ、そのなかには多くの副葬品が納められていました。

- 前方後方墳：規模 全長63m
 後方部幅33m 同高さ 6 m
 前方部幅22m 同高さ 2 m
- 構造 竪穴式石室
- 遺物 鏡 1・ガラス小玉481・
 鉄剣 3・鉄斧 1・銅鏃 1・
 鉄鏃21以上・土師器（壺・
 高坏・器台・手焙り形土器）



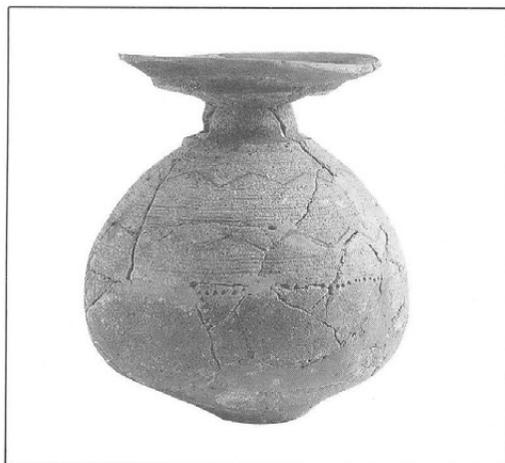
墳丘図



副葬品配置

土師器（壺形土器）

竪穴式石室の直上にあたる位置からは葬送儀礼で使われた土師器の壺・高坏・器台・手焙り形土器が出土しました。これらのなかには東海地方西部との関係の強い土器があり、古墳の性格を考える上で大きな問題をなげかけています。



半三角縁四獣文鏡

「上方作竟自有□青□左白馬居右」の銘をもつ舶載鏡。鏡面には赤色顔料が付着していました。直径11.65cm。



鉄 斧

石室の北東端、中央部で発見されたものです。布・木質の一部が錆とともに残っていたことから、布に包まれて木箱に入っていたと考えられています。



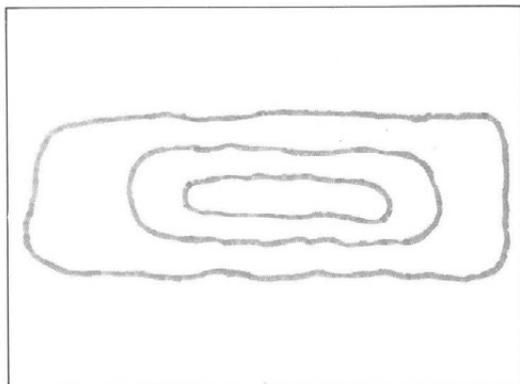
銅鏃・鉄鏃

石室内の床面の遺体のあった周辺からは銅鏃・鉄鏃・鉄剣などの武器類が出土しました。



ガラス小玉

コバルトブルーと淡緑色をしたガラス小玉は、石室内の3箇所からまとまって出土しました。数や位置から考えて、これらのガラス小玉は首飾り・腕飾りとして使われたものと考えられています。



ガラス小玉

中山36号古墳

弘法山古墳と和泉川の谷をへだてた棺護山に築かれた古墳で、開成中学校のコート造成の際に発見され、昭和46（1971）年に調査されました。

古墳からは、土師器の壺や弘法山古墳のものと類似した鏡が出土しており、4世紀後半の築造と考えられています。

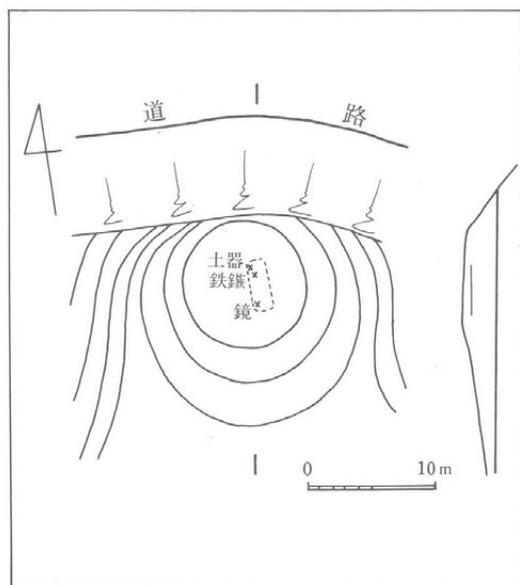
円墳：規模 直径15m 高さ2.5 m

構造 粘土槨？

遺物 鏡（「宣□□上方作竟自有紀」銘）

土師器（壺）

鉄製品



墳丘図



壺



半三角縁六獣文鏡

桜ヶ丘古墳

浅間温泉東南の丘陵端に位置する古墳で、昭和35（1960）年に発掘調査されました。

墳丘の中央の、副葬品を納めるための副室をともなった河原石積みの石室からは多くの装身具・武器・武具が発見されました。特に、天冠は大陸文化の影響を受けている貴重なもので県宝の指定を受けています。5世紀末から6世紀前半の築造と考えられています。

円墳：規模 直径18m 高さ4m

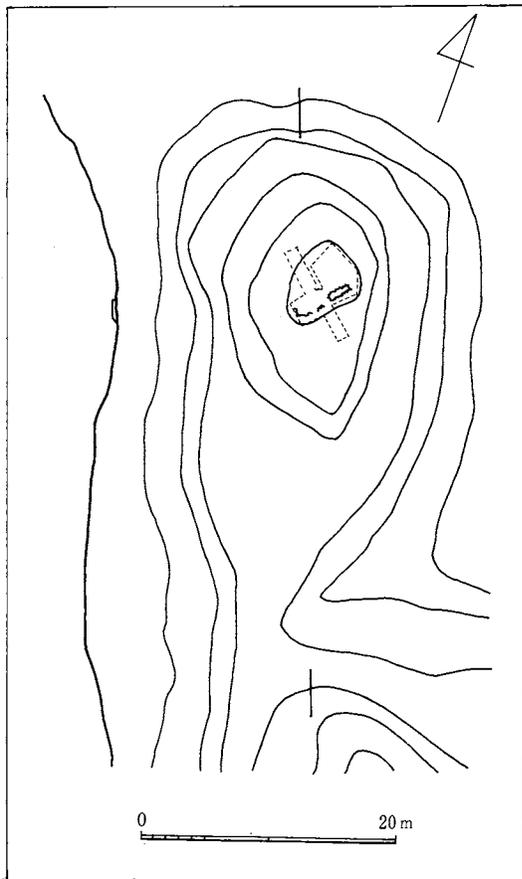
構造 竪穴式石室？

遺物 衝角付冑1・短甲1・頸鎧1

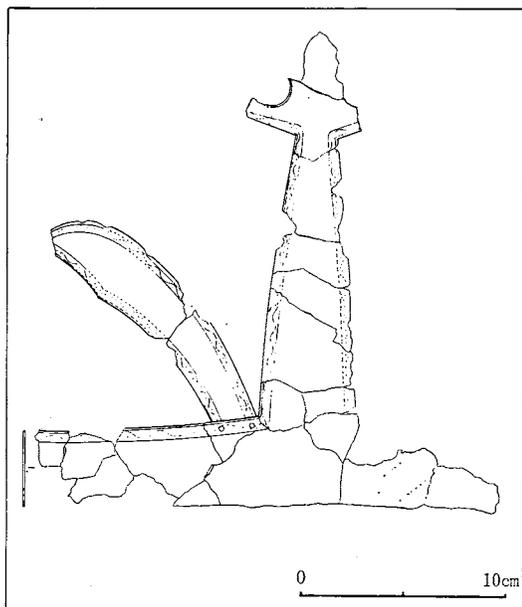
鉄刀1・鉄剣5・鉄銚^{ほこ}1・鉄

鍬数个・天冠1・竹櫛1・勾

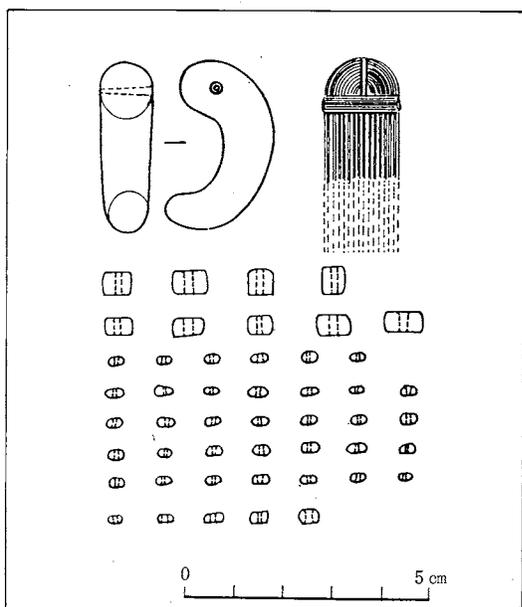
玉1・丸玉9・小玉35・白玉5



墳丘図



天冠



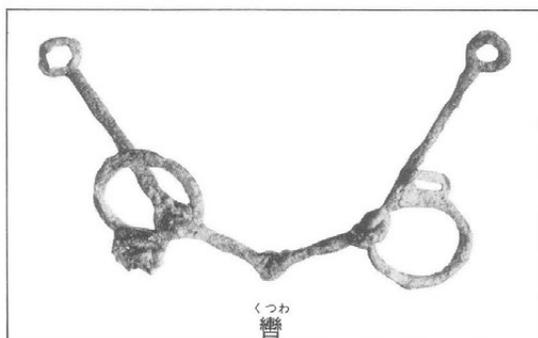
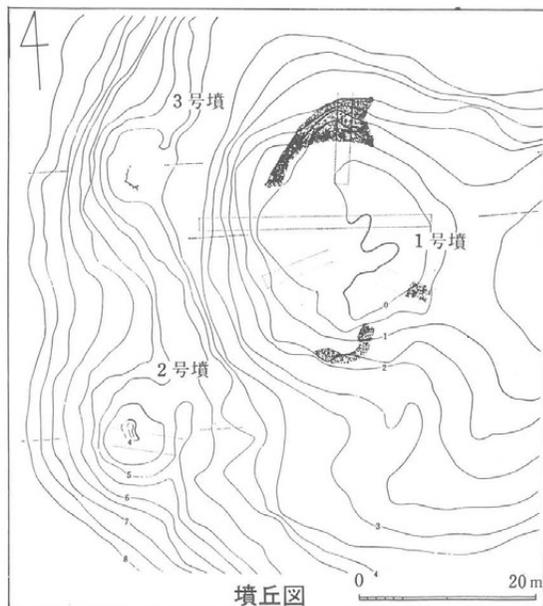
装身具

妙義山古墳群

浅間温泉の南、大村東方の丘陵端部に3基の古墳が築かれています。

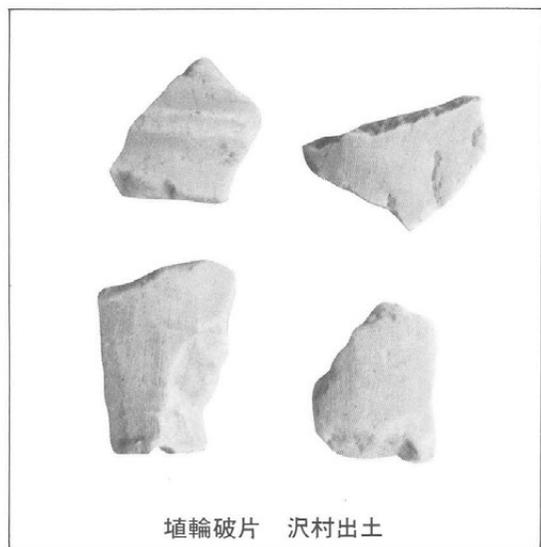
1号墳は、直径32～35mの円墳で、墳丘斜面には葺石ふきいしがみられます。内部構造・副葬品はわかりませんが、墳丘規模の点からかなりの有力者だったのではないかと考えられます。

また、2・3号墳は、1号墳の陪塚的な性格が考えられます。特に2号墳の石室内からは3体の人骨とともに多くの装身具・武器・馬具が出土しています。



埴輪

古墳の墳頂部や段になっているところに埴輪はにわをめぐらす古墳は各地でよくみられます。埴輪には、筒形の胴部をもつ円筒埴輪、人・動物・器材を模した形象埴輪があります。しかし、松本平では埴輪を伴う古墳についてはほとんど知られていません。

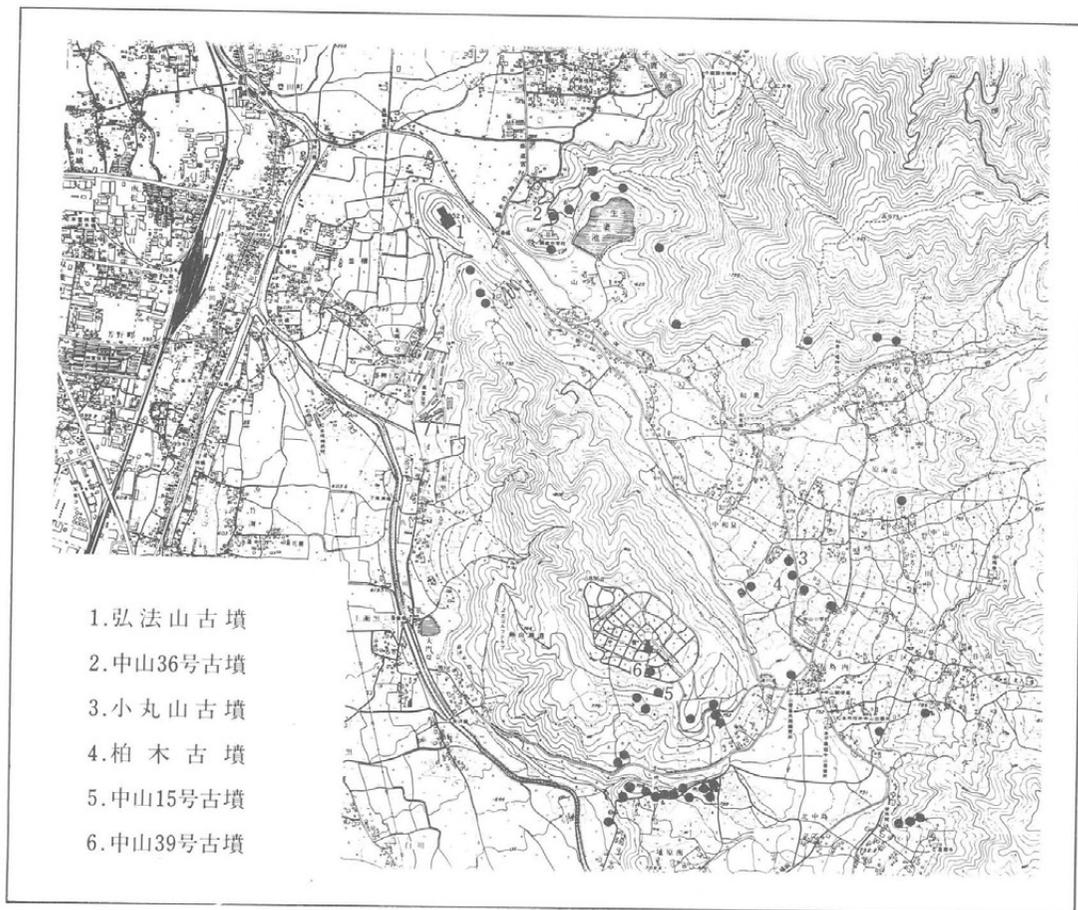


中山古墳群

中山丘陵には明治のはじめ頃には100基をこえる古墳があったといわれていますが、現在では40数基の古墳が残っているだけです。広義の中山古墳群は、弘法山古墳・中山36号古墳の前期古墳から、横穴式石室をもつ後期古墳までを含み、時期・立地・分布状況などから、さらに小さな古墳群に分けられます。そのなかでも、中山丘陵の南斜面には、馬具・武具を副葬品にもつ横穴式石室の円墳が数多く分布しています。



小丸山古墳



中山古墳群分布図

柏木古墳

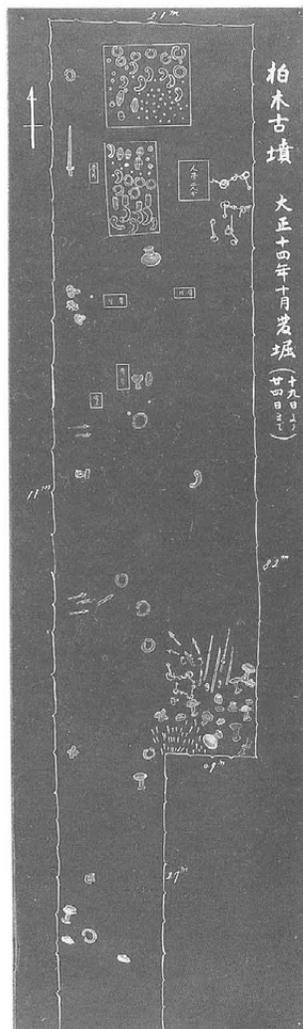
中山丘陵の東斜面に位置する古墳で、6世紀後半頃築造の、中山の古墳群のなかでも古いものです。

大正14（1925）年に発掘調査され、横穴式石室からは多くの副葬品が出土しました。その出土状態は発掘した人たちによって詳細な図が残され、中山古墳群のなかでも構造・出土状態が判明している数少ない古墳のひとつです。

円墳：規模 直径17m 高さ1m

構造 横穴式石室

遺物 勾玉12・管玉3・切子玉6・
小玉・丸玉25・金環・銀環15
直刀4・鉄鏃53・轡^{くつわ}4・辻金
具3・須恵器（高坏4・提瓶
1・皿1・壺1）・土師器（高
坏2・皿1・甗1）



横穴式石室見取図

土師器と須恵器

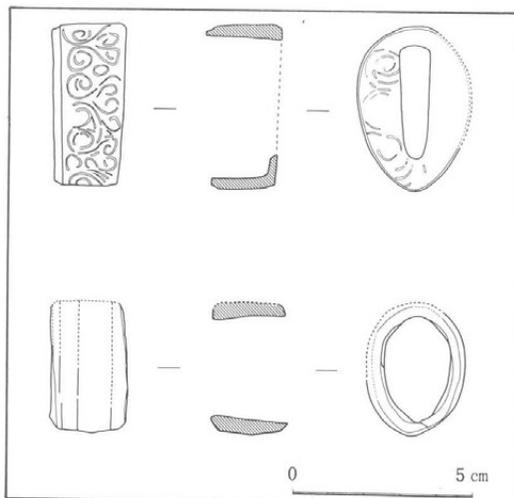
古墳時代では、弥生土器の系統をひく土師器とよばれる素焼きの土器が使われました。また、古墳時代の中頃には、大陸から伝えられた技術によって、かたくて丈夫な灰色をしたやきもの——須恵器が作られるようになりました。しかし、須恵器は当初は人々の手に入りやすく、日常生活に使われることは少なく、多くは古墳の副葬品として使われました。



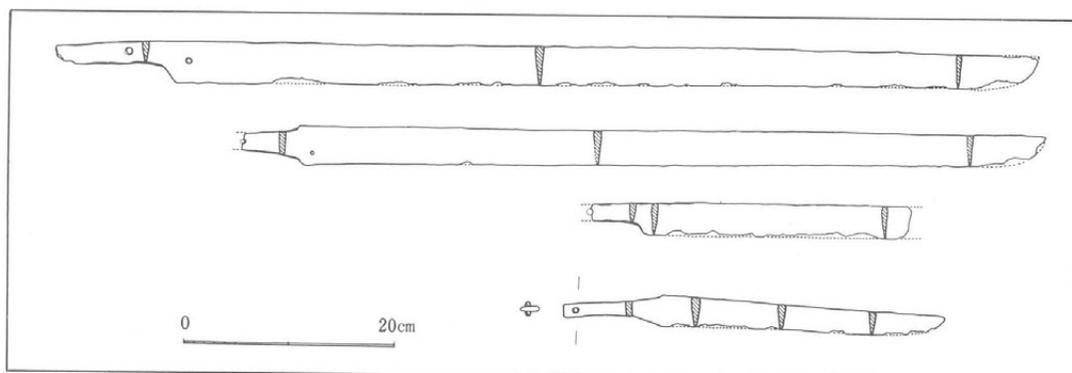
武器・武具・馬具

古墳の副葬品のなかには^{こんどう}金銅技術や^{ぞうがん}象嵌技術を用いてつくられた武具・馬具があります。

柏木古墳からは、金環・銀環のほか、鉄地金銅張りの辻金具、銀象嵌の刀装具・^{つば}鐙が出土しています。また、実用には適さない長刀(直刀)が出土しており、古墳の被葬者がかなりの有力者だったことをうかがわせます。



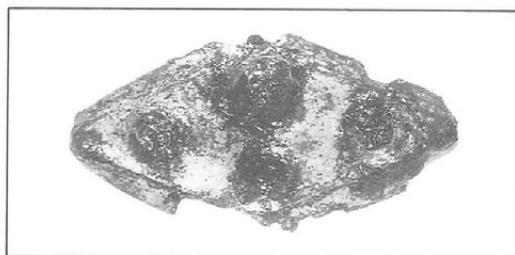
銀装の刀装具



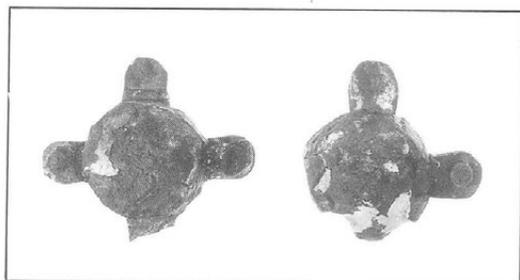
直 刀

中山古墳群出土遺物

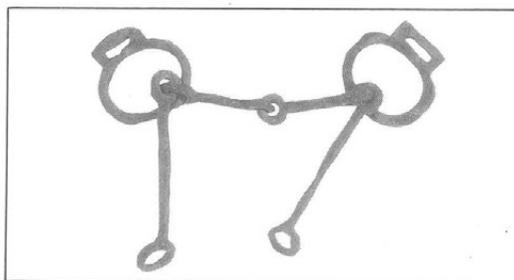
中山古墳群の多くは消滅してしまいましたが、古墳の副葬品が採集されているものがあり、古墳の年代や性格を知る貴重な手がかりとなっています。



留金具 中山15号古墳



辻金具 柏木古墳



轡 柏木古墳



高坏 坂上古墳



長頸壺 中山39号古墳

終末期の古墳

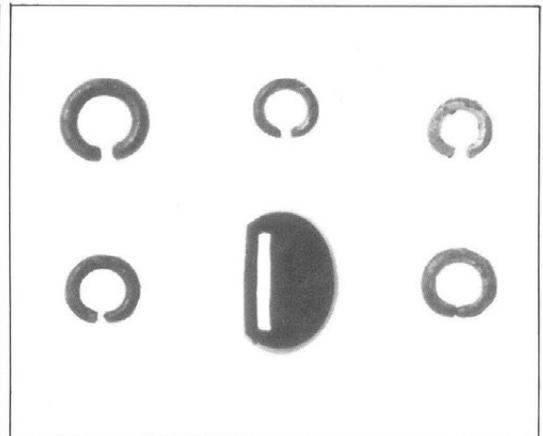
新村の秋葉原古墳群・安塚古墳群は横穴式石室をもつ円墳からなる比較的新しい古墳群です。なかには、8世紀代の遺物を副葬品にもつ古墳があり、一般に古墳がつくられなくなる8世紀にはいっても一部の地域では古墳が築造、あるいは追葬が行われていたことが考えられます。



安塚第8号墳



高坏



金環 か 鈿帯

奈良・平安時代（約1,300年～800年前）

7世紀の後半以降、中央集権化がすすむと地方は整備されて中央とのかかわりを強くしていきました。

現在の松本市は、信濃の国の筑摩郡の一部になりました。8世紀の終り頃には国府が上田から移り、松本は政治の中心になりました。また、信濃の国には朝廷に納める馬を飼育する16の牧がおかれ、中山の埴原の牧にはこれらをまとめる^{もくげんちよう}牧監庁がありました。

奈良・平安時代には中国にならった都がつくられ、政治・文化の中心となりました。都は碁盤の目のように整然と区画され、役所をはじめ貴族の屋敷や瓦ぶきの寺院が建ち並んでいました。

まちの中では定期的に市が開かれ、各地の産物が集まり、多くの人々が行きかって活気に満ちていました。

このような貴族のはなやかな生活に対して、多くの庶民達は厳しい税のとりたてや労働をしいられるなど、苦しい生活を送っていました。

奈良・平安時代の遺跡は現在の集落とほとんど重なっており、その数は168と多く、また最近の発掘調査によって更に増加の傾向にあります。



南栗遺跡

須恵器の生産と灰釉陶器

土器は古墳時代に引き続いて、土師器と須恵器が使われていましたが、次第に須恵器のしめる割合が多くなってきました。

9世紀に入ると松本の北東の山地でも須恵器が生産されるようになり、現在数十のカマ跡が残っています。

その頃、寺院や役所では須恵器の系統をひく釉（うわぐすり）をかけた灰釉陶器が使われはじめました。農村では平安時代の中頃になってから使われるようになりました。

須恵器



四耳壺 南栗遺跡

灰釉陶器



坏 神戸遺跡

土師器



坏 南栗遺跡



高坏 秋葉原古墳



甕



長頸瓶 秋葉原古墳



四耳壺 南栗遺跡



手付瓶 南栗遺跡

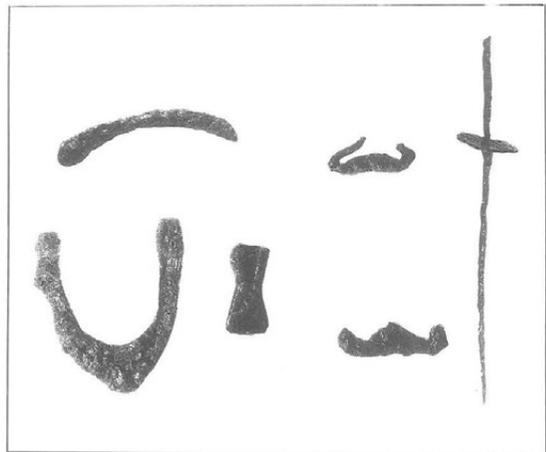


平瓶 下神遺跡

鉄の道具

鉄の道具は古墳時代の中頃に大陸の影響を受けて改良されて以来、奈良・平安時代にいたるまで大差ないものが使われました。

松本では鉄製のU字形の刃先をつけたクワやスキ、鎌などの農具のほか、刀子、紡錘車、火打ち金具などが出土しています。このようにこの時代には多くの鉄製の道具がつくられて、広く生活のすみずみまで使われていました。



仏教の広まり

都を中心として広がった仏教は、やがて地方にも伝わり、多くの人々の間で信仰されるようになりました。

また仏教のほかにも神や民間信仰が信じられ、それらに関する物が遺跡から発見されています。松本では仏具として用いられた三彩の小壺や銅の鏡、小形の仏像などのほか、骨を入れた大甕や壺などが出土しています。

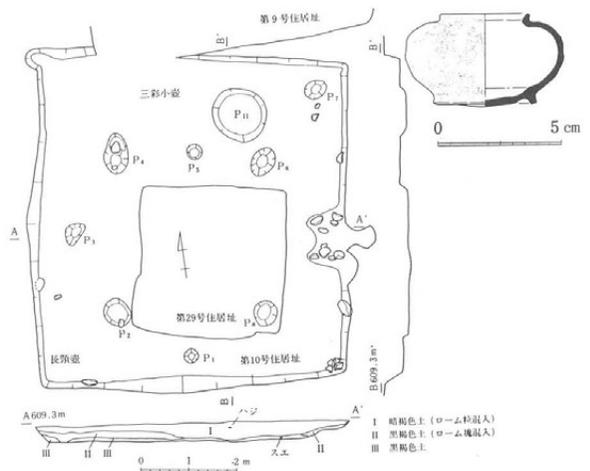
くまの川遺跡では鉄鐸が出土しましたが、これは塩尻市北小野の小野神社の宝物にあるように、神を招く時の儀式に使われたものと考えられています。



奈良三彩小壺

神林の下神遺跡の熊坂地籍第10号住居址から出土しました。この時検出された住居址は奈良時代から平安時代中頃にかけて、合計79軒にのぼり、三彩小壺を出した家は6.6×7.0mもある方形の極めて大きな家で、小壺は北側の床面より出土しました。他に須恵器の長頸壺、坏、蓋が出土しました。

小壺は口径3.6、底径4.2、器高3.7cmで口縁から肩にかけて欠けていますが、緑、褐色、白の三色の釉（うわぐすり）が美しい薬壺です。三彩は都で作られたもので、長野県下で三点しか出土しておらず、ごく限られた者しか所有出来なかったものと思われます。



奈良三彩小壺 出土位置及び実測図

埴原の牧

平安時代朝廷専用の牧場（勅旨牧^{てしまき}）が設けられ、信濃には16の牧がつくられ、これを統括する牧監庁^{もくげんちやう}が埴原牧におかれました。

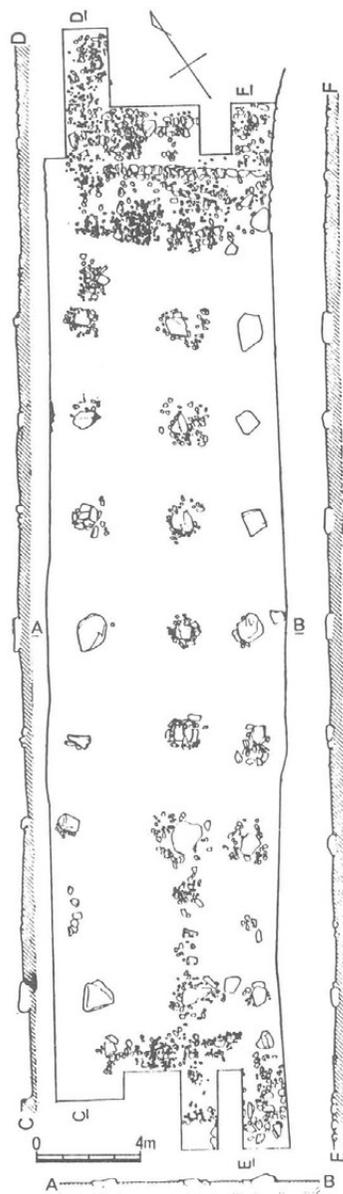
牧監は国司に準ずる権力を持ち、都から赴任しました。

牧監庁跡は考古博物館の北西に接し、昭和39（1964）年の発掘調査によって礎石群が発見され、間口9間（16.2m）奥行3間（5.4m）の建物址であることが確認されました。

牧場は鉢伏山麓西側と、中山丘陵の間にひろがっていたものと思われ、南の古屋敷と千石地籍には冬季間馬を追込む繫飼場跡^{けいし}があり、6段のテラスが残っています。



推定信濃牧監庁跡



推定信濃牧監庁跡平面図



千石繫飼場跡

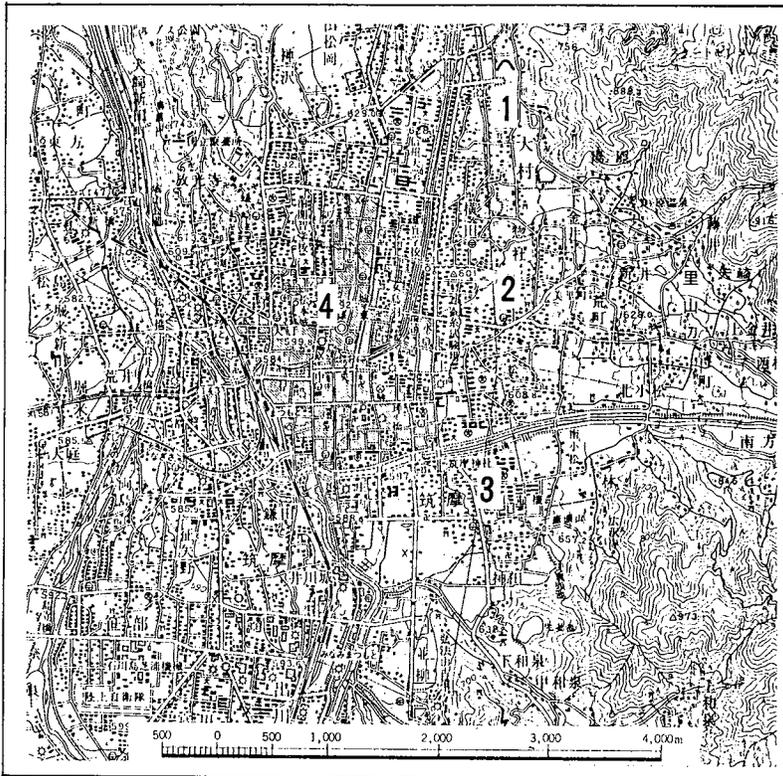
信濃国府

国の東北地方を治める政策の一つとして信濃に国府がおかれ、8世紀の終わり頃上田から松本に移ってから、およそ400年間にわたって信濃国の政治の中心として栄えました。

国府は中央の都を小さくしたもので、国庁を囲んで8町(872m)四方、あるいは6町(654m)四方の街で、松本では(1)大村説、(2)惣社説、(3)筑摩説、(4)深志説があって、実際にはどこにあったのかまだわかっていません。

そのため、市教育委員会では昭和57(1982)年から5年間にわたって、惣社周辺を中心に発掘調査をしましたが、奈良・平安時代の住居址の発見はあったものの、国府の存在を証明するような遺構・遺物は何も出ませんでした。

- 1.大村
- 2.惣社
- 3.筑摩
- 4.深志



信濃国府推定地

年 表

年代	時代	できごと	時期	松本市の主な遺跡	
前30,000	旧石器	石槌が使われる	後期	中山・赤木山など (石槌)	
10,000			草創期		
7,000	縄文	土器が出現する 弓矢が出現する 竪穴式住居に住むようになる ムラをつくり、定住的な生活をするようになる ムラが大きくなる 土掘り具が増加し、弓矢が減少する	早期	こぶし畑遺跡	
4,000			前期	白神場遺跡 雨瀬遺跡	
3,000			中期	牛の川遺跡	
2,000			後期	女鳥羽川遺跡	
1,000			晩期	石行遺跡	
300	弥生	北九州に大陸の文化(稲作、鉄・青銅器の使用)が伝わり、弥生文化がはじまる (弥生文化が西日本に広がる) 長野県にも弥生文化が伝わる (57) 倭奴国王、後漢に使いを送り、金印を受ける (239) 邪馬台国の女王卑弥呼、魏に使いを送る 鉄器が普及し、石器が姿を消す	前期	針塚遺跡	
100			中期	百瀬遺跡	
0			後期	あがた遺跡 宮瀬本村遺跡	
200	古墳	西日本で古墳がつくられはじめる 大和朝廷が成立する 須恵器がつくられる 横穴式石室の古墳がつくられるようになる 住居内にカマドがつくられるようになる (538) 百濟より仏教が伝わる (645) 大化の改新 (685) 天武天皇、東間瀬に行宮を造らせる (701) 大宝律令ができる	前期	弘法山古墳 中山36号墳	
400			中期	白神場遺跡 桜ヶ丘古墳	
500			後期	(710) 藤原京から平城京へ都が移る (713) 吉蘇路(木曾路)が開通する (741) 国分寺、国分尼寺建立の詔が出される 上田に国分寺・国分尼寺が建てられる	柏木古墳 秋葉原古墳群 安塚古墳群
600					北栗遺跡 南栗遺跡
700	奈良				
800	平安	(794) 長岡京から平安京へ都が移る このころ、信濃国府が上田から松本へ移る (797) 監牧之司に埴原牧の田六町が公廩田として与えられる 松本市の北東部で須恵器の生産がさかになる (927) 延喜式50巻がつくられ、筑摩郡に岡田神社、沙田神社、阿礼神社(塩尻市)が記される 灰釉陶器が農村でも使われるようになる (1108) 浅間山が大噴火する (1156) 保元の乱 (1159) 平治の乱 (1192) 源頼朝、征夷大将軍となる			
900					
1,000					
1,100					
1,200					

展示資料一覧

時代	コーナー	資料名	数	出土地	遺跡・遺構名
	アプローチ	深鉢 (レプリカ)	1	内田	雨堀6住
旧石器	旧石器	尖頭器	7	中山	
縄	ジオラマ	深鉢	8	内田 笹賀 レプリカ	雨堀8住 1 牛の川B6住 6 1
		打製石斧	2	中山	
		石皿	1	〃	
		磨石	1	〃	
		石棒	1	内田	雨堀6住
		弓	1	レプリカ	
		矢	1	レプリカ	
	住居址一括	深鉢	7	内田	雨堀6住
		打製石斧	13	〃	〃
		スクレーパー	1	〃	〃
石鏃		5	〃	〃	
石錐		2	〃	〃	
石匙 凹石		1 1	〃 〃	〃 〃	
土器	浅鉢	1	寿	前田木下2住	
	釣手土器	1	本郷	柳田1住	
	深鉢	1	〃	〃	
	ミニチュア土器	2	内田 中山	雨堀配石址 1 1	
道具	打製石斧	10	笹賀 中山	牛の川5住・8住 各1 〃 グリッド 3 5	
		7	笹賀 中山	牛の川1・4住、グリッド 各1 4	
	磨製石斧	15	内田	雨堀4・9住、配石址 各1, 14住 2 雨堀 1	
		7	笹賀 寿	牛の川3住 1、10住 2 北原 6	
	石鏃	7	内田	雨堀3住 1、8住 2	
	石匙	7	内田		
	石匙	7	内田		

時代	コーナー	資料名	数	出土地	遺跡・遺構名
縄文	信仰	石剣 埋甕	2	中山 寿	1 前田8住
弥	ジオラマ	台石 土器	4 9	宮淵 レプリカ	宮淵本村5住
	住居址一括	小形甕	2	県	あがた8住
		甕	4	〃	〃
		壺	6	〃	〃
太形蛤刃石斧		1	〃	〃	
石庖丁		3	〃	〃	
打製石鏃		2	〃	〃	
磨製石鏃		1	〃	〃	
土器	鉢	1	〃	あがた16住	
	高坏	1	〃	〃	
	甕	1	〃	〃	
	台付小形甕	1	〃	あがた弥生1住	
	小形甕(モミ痕付着) 〃(布目痕付着)	1 1	〃 宮淵	あがた16住 宮淵本村26住	
道具	太形蛤刃石斧	4	県	あがた5・16住 各1	
		宮淵	宮淵本村30住 1		
	扁平片刃石斧	3	県	あがた7・13・16住 各1	
		〃	〃	〃 表採 1	
	石庖丁	6	〃	あがた7・18住、各1	
		〃	〃	〃 16住 2	
	打製石鏃	10	宮淵	宮淵本村 2	
		〃	県	あがた16・18住 各1	
	磨製石鏃	14	宮淵	宮淵本村1・16・25・26・33住・土廣52 ・古墳1・表採 各1	
		〃	県	あがた5・11住 各1, 6住 3, 16住 6, 宮淵1・33住 各1	
	石鏃	3	中山	1	
		〃	県	あがた18住	
	紡錘車	2	宮淵	宮淵本村18・29住 各1	
		〃	県	あがた16住	
鉄鏃	1	宮淵	宮淵本村39住		
	〃	県	あがた16住		
(演示具)	手斧(扁平片刃石斧)	1	県	あがた弥生1住	
		〃	〃	〃	

時代	コーナー	資料名	数	出土地	遺跡・遺構名
弥生	(演示具)	斧(太形蛤刃石斧) 石庖丁 紡錘車	1 1 1	中山 宮淵 県	宮淵本村38住 あがた16住
	装身具	管玉	3	宮淵	宮淵本村32・33・39住 各1
生	信仰	壺	6	里山辺	針塚(再葬墓)
		大甕	1	〃	〃
		蓋石 銅鐸	1 1	レプリカ	宮淵本村出土品を参考
古墳	住居址一括	壺	1	寿	白神場12住
		甕	1	〃	〃
		小形壺	1	〃	〃
		小形甕	1	〃	〃
		埴	2	〃	〃
		高坏	2	〃	〃
	土器	甕	2	笹賀 里山辺	くまのかわ2住 下原
		長胴甕	1	笹賀	くまのかわ2住
		坏	2	島立 里山辺	南栗38住 下原
		甗 横瓶	1 1	宮淵 神林	宮淵本村37住 下神16住
墳	中山36号墳	半三角縁六獣文鏡 壺	1 1	神田 〃	中山36号古墳 〃
	桜ヶ丘古墳	天冠(レプリカ)	1	本郷	桜ヶ丘古墳
	中山古墳群	長頸壺	2	中山	中山39号古墳
		坏	4	〃	〃
		蓋	4	中山	〃
坏		6	〃	丸山古墳	
蓋		6	〃	〃	
高坏		4	〃	〃	
平瓶	1	〃	向畑古墳		
勾玉	4	〃	桜立古墳		
丸玉	2	〃	〃		

時代	コーナー	資料名	数	出土地	遺跡・遺構名
古墳	弘法山古墳	鉄鏃	20	出川	弘法山古墳
		銅鏃	1	〃	〃
		ガラス小玉	3連	〃	〃
		鉄器破片	2	〃	〃
奈良・平安	住居址一括 (奈良時代)	甕	2	島立	南栗17住
		甕 (須恵器)	1	笹賀 新村	くまのかわ2住 秋葉原1号墳
		高坏	1	〃	〃
		短頸壺	2	〃	〃 1・2号墳
		長頸壺	3	〃	〃 2号墳
		高坏	1	〃	〃 1号墳
	住居址一括 (平安時代)	甕	2	島立	南栗4住
		内黒坏	1	〃	〃
		内黒壙	2	〃	〃
		四耳壺	1	〃	〃
坏		1	〃	〃	
小瓶		1	〃	〃	
手付長頸壺		1	神林	下神2住	
土器 (灰釉陶器)	碗	2	〃	〃 6住	
	段皿	1	〃	〃 3住	
	耳皿	2	神林	下神12・14住 各1	
	平瓶	1	神林	下神12住	
道具	鋤頭	1	島立	南栗16住	
	鎌	1	〃	〃	
	鉄斧	1	〃	〃 9住	
	火打ち金具	2	〃	〃 10住, 土壙43 各1	
	紡錘車(鉄製)	1	笹賀	神戸	
	〃 (土製)	3	島立	南栗6・9・62住 各1	
	土錘	6	〃	〃 6・7・61・62・75住, 竪13 各1	
	砥石	2	〃	〃 11住	
食物	大麦		島立	南栗7住	
装身具	釵子	1	梶	あがた土師1住	
信仰	奈良三彩小壺(レプリカ)	1	神林	下神10住	

時代	コーナー	資料名	数	出土地	遺跡・遺構名
奈良 ・ 平安	信仰	銅鏡	1	島立	南栗6住
		仏像	1	笹賀	神戸
		鉄鐸	12	〃	くまのかわ6住
		大甕 (須恵器)	1	〃	神戸20号墓址
		碗 (灰釉陶器)	3	〃	〃
		皿 (〃)	7	〃	〃
		碗 (緑釉陶器)	1	〃	〃
		破片 (〃)	7	〃	〃
		長頸壺 (灰釉陶器)	2	平田	平田墓址
		碗 (〃)	1	〃	〃
		皿 (〃)	1	〃	〃
	土器の変遷	深鉢 (縄文前期)	1	寿	白神場9住
		〃 (〃 中期)	3	〃	前田2住
		〃 (〃 後期)	1	中山	牛の川9・10住 各1
		鉢 (〃 晩期)	1	本郷	柳田
		壺 (弥生後期)	1	中山	
		甕 (平安時代)	1	神林	下神17住
	土器の手ざわり	深鉢 (縄文中期)	1	中山	坪ノ内
	石器づくり	黒曜石原石	3		下諏訪町和田峠産
		石器製作過程(レプリカ)	19		(財)東京都埋文センター 館野孝氏 製作
		石器一括 (弥生時代)			
		砥石	2	県	あがた弥生1住
		磨製石鏃	2	〃	〃
		〃 (未製品)	15	〃	〃
石庖丁 (未製品)	2	〃	〃		

引用・参考文献

- 『長野県松本市北埴原推定信濃牧監庁跡調査概報』『信濃』第16巻第12号
一志茂樹、斎藤 忠、大川 清、原 嘉藤 信濃史学会 1964. 12
- 『信濃浅間古墳』 本郷村教育委員会 1966. 4
- 『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1972. 3
- 『長野県松本市中山36号古墳調査概報』『信濃』第24巻4号 松本市教育委員会 1972. 4
- 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻 「歴史」上 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973
- 『弘法山古墳』 松本市教育委員会 1978. 6
- 『縄文時代の日本』 『歴史公論』通巻39号 雄山閣 1979. 2
- 『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』 松本市教育委員会 1979. 12
- 『松本市笹賀牛の川遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1980. 3
- 『松本市中山の古墳、古墳群』 『長野県考古学会誌』36 桐原 健 長野県考古学会 1980. 3
- 『松本市内田雨堀遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1981. 3
- 『松本市あがた遺跡発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1981. 3
- 『松本市笹賀神戸遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1981. 3
- 『長野県史』 「考古資料編 全一卷(一) 遺跡地名表」 長野県史刊行会 1981. 3
- 『松本市笹賀くまのかわ遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1982. 3
- 『展示概説』 山梨県立考古博物館 1982. 11
- 『松本市新村秋葉原遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1983. 3
- 『推定信濃国府 第1次～第4次調査報告書』 松本市教育委員会 1983～1986
- 『長野県史』 「考古資料編 全一卷(三) 主要遺跡(中信)」 長野県史刊行会 1983. 3
- 『松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1984. 3
- 『松本市下神・町神遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1984. 3
- 『弥生時代の知識』 考古学シリーズ5 甲元真之、山崎純男 東京美術 1984. 3
- 開館3周年記念特別企画展『縄文人のくらし』 長野市立博物館 1984. 10
- 『松本市赤木山遺跡群I 緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1985. 3
- 『松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条里的遺構緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1985. 3
- 『松本市島内遺跡群 北方遺跡・南中遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1985. 3
- 『松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1986. 3
- 『松本市竹淵・南原遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1986. 3
- 『松本市島内遺跡群 上平瀬遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1986. 3
- 『松本市岡田西裏遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1986. 3
- 『松本市宮淵本村遺跡緊急発掘調査報告書』(遺構編) 松本市教育委員会 1986. 3
- 『松本市島立条里的遺構緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1986. 3
- 長野県の歴史シリーズ1 『図説・松本の歴史 上』 樋口昇一、桐原 健、中川治雄 郷土出版社 1986. 3
- 日本古代史3
『古代人の心を読む・宇宙への祈り』 責任編集 金関 恕 集英社 1986. 5
- 日本人はどこからきたかシリーズ
『古代人の知恵を発掘する』 戸沢充則 監著 福武書店 1986. 6
- 『日本人の心をさぐる』 鈴木公雄、中村孚美 監著 福武書店 1986. 7
- 『古代人の暮らしをさぐる』 江坂輝彌、渡辺 誠 監著 福武書店 1986. 7

展示解説

昭和62年3月1日 発行

発行 長野県松本市大字中山3738番地の1

松本市立考古博物館

TEL (0263)86-4710

印刷 株式会社総合印刷所

